様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１１７７

研究課題名（和文）アジア地域における家庭科プロフェッショナル育成の連携支援プログラム

研究課題名（英文）A Development of Learning and Training Program for Home Economics Professionals in Asian Regions

研究代表者
中山　節子（NAKAYAMA, Setsuko）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０３９６２６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：アジア地域諸国では、学校教育における家庭科のカリキュラムや教科書作成、指導者養成に携わる家庭科の専門性を持つ人材や指導者が不足しており、その育成や研究の課題がある。本研究では、アジア地域の家庭科教員の専門性向上のための研修プログラム及び研修用テキストの開発を目的とした。研修プログラムは、アジア３カ国と日本から参加者を選出して実施し、アジア地域の家庭科プロフェッショナル養成と日本のグローバル人材育成を双方向型の連携支援プロジェクトとして高い評価を得た。研修用テキストは、研修プログラムで得た課題を踏まえて改訂し、研究成果の集大成としてまた日本の家庭科を国外に向けて広く発信できるように作成した。

研究成果の概要（英文）：Home economics teachers are given systematic teacher training program at Japan's higher education institutions unlike that in other Asian regions where, however, interest in such training has grown. The study aims to develop an educational program for home economics professionals in Asia in response to a shortage of human resources and training programs and institutes. The study also had the purpose of developing a textbook for such a training program. The training program aims at educational exchange and international understanding of Japanese and Asian region Home Economics professionals. The participants will be expected Home Economics teacher / professionals who purse advanced professionals or a leadership position and selected from Indonesia, Japan, Singapore, and Thailand. The participants had fruitful experience through mutual learning in the intensive course. A text book of the training program was published as a completion of the research.

研究分野：家庭科教育

キーワード：家庭科教育　研修プログラム開発　アジア地域

１．研究開始当初の背景

世界における日本の家庭科教育は、イニシアチブを取る位置にある。世界的に見て、小中高のすべての校種において「家庭科」を男女共修の必修科目としてカリキュラムに位置づけている国は極めて少ない。ゆえに、これまでも、日本と他国の国際共同研究が、個人レベルではあるが、遂行されてきた。組織的レベルにおいては、日本女子大の文部科学省による国際教育協力拠点システムとして採択された発展途上国における家庭科教育の推進プロジェクトがあり、家政学・家庭科教育の最大組織である国際家政学会（IFHE）及びアジア地区家政学会（ARAHE）においても評価されてきた。ただし、日本も含めたアジアにおける家庭科教員の専門性プロフェッショナル育成を通してグローバルネットワークをめざした研究は見当たらない。このような取り組みは、多くのアジア地域諸国において嘱望されている。なぜならばそれらの国では、家庭科教員養成機関は存在するが、より専門性の高い家庭科の指導者育成やプロフェッショナルレベルの育成する機関や場が限られており、日本の家庭科教育が蓄積してきた豊富な学際的研究知見や経験をもとにした協力支援のニーズは高いからである。一方で、日本においては、高等教育機関の研究者のグローバル人材育成の必要性が高まっており、特に若手教育者及び研究者養成の効果的なプログラムや研修開発が喫緊の課題となっている。本研究は、その両者のニーズを融合させ、双方向型の支援による新しい教育研修プログラムの開発、さらにはグローバルネットワークによる研修のシステムの形成を目指すものである。

２．研究の目的

本研究は、アジア地域諸国において、家庭科教員養成機関や人材が不足している課題に対応し、これまで日本の家庭科教育が蓄積してきた豊富な学際的研究知見と経験を踏まえて、アジア地域の家庭科教員の専門性向上や指導者の育成のための研修プログラム及び研修用テキストの開発とそのプログラムの効果を検証する実践的かつ実証的研究である。この研修プログラムは、次の３点の特徴を有している。

①自国の家庭科を自ら創ることを目指すプロフェッショナル養成と日本人若手研究者のグローバル人材育成の二つを目的とした双方向型の連携支援プロジェクトである。

②研修は、アジア地域諸国と日本の若手研究者を参加者とし、英語で実施する。

③日本の家庭科教科書をもとにした英語のテキストを作成し、研修プログラムで使用する。このテキストは日本の家庭科教育の蓄積を世界に発信する役割も兼ねている。

３．研究の方法

アジアにおける家庭科教員の専門性プロフェッショナル育成のために、英語を用いた研修プログラム及び研修用テキストの開発と行いない、アジアと日本の若手家庭科教育研究者または教員を対象に研修プログラムを実施し、成果と課題を明らかにする。対象者は、関連学会ネットワーク等を活用して募集し、アジア諸国からの参加希望者と日本からの参加希望者で構成する。プログラムの内容については、予備調査から得られた現在のアジア地域諸国の問題と現状に関する知見を加味し、本研究に携わる構成員らがこれまで開発してきた教育プログラムで有効性が実証されているメソッドを基にして検討する。

研修用テキストの開発にあたっては、日本の家庭科教育の蓄積を世界に発信する役割を兼ねることを意識し、日本の小学校及び中学校家庭科教科書を基にし、生活の基礎・基本となる事項、領域内容のバランスなどに重点を置く。

４．研究成果

（１）研修プログラム

研修プログラムの参加者は、アジア地域諸国と日本の家庭科教育実践者である。各国より多数応募があり、インドネシア、タイ、シンガポールより各２名を選出した。日本の参加者は、若手研究者及び小中高等学校の現場で指導実践がある教員７名を選出した。

研修は事前・日本における研修・事後で構成した。

研修の事前にPIP（Projection Images by Photography）メソッドを用いた研修を実施した。自国や自分の地域における生活課題に関する写真を撮り、撮影後にその写真を撮った理由について記しておく。日本における研修においては、この写真を用いながらポスター発表を導入として各国の生活文化に関するアカデミックな交流をしながら課題の把握や意見交換を行うための課題に取り組んだ。課題の把握が十分でない参加者にはメールでコミュニケーションを取ってフォローアップを行った。

日本における研修プログラムは、2016年7月27日～31日に千葉大学にて実施された。研修内容は、Introduction guidance,

Kateika at school, Food cultural exchange, Clothing and Housing, Sewing practice, Child Development and Care, Family and Community, Kateika and ESD, Experience wearing kimono, Cooking practice, Food and Cooking, Country presentation of Education and Home Economics, Wrap-up activity である。表１にプログラムの流れを示す。

表１　日本における研修プログラム

Program schedule

	Day	9:00-10:30	10:40-12:10	12:10-13:00	13:00-14:30	14:40-16:10
July 27 (Mon)	1	Introduction guidance	Campus tour・Lunch (11:30-13:30)		Elementary, Junior high, Senior high school	
		Ito		Student	E（Furushige）・JH (Kamano)・H(Nakada)	
July 28 (Tue)	2	Food cultural exchange1	Clothing and Housing ＊Text		Sewing practice	
		Ito	Nishihara		Nishihara	
July 29 (Wed)	3	Child Development and Care ＊Text	Family and Community ＊Text		Kateika & ESD	Experience wearing a kimono
		Ito	Fujita		Ito	Nakada
July 30 (Thu)	4	Cooking practice (Japanese food)			Food Cultural exchange 2	Food and Cooking ＊Text
		Kawamura				Kawamura
July 31 (Fri)	5	Country presentation of Education & Home Economics			Wrap-up activity	Farewell party
		Ito			Nakayama	All participants

日本での研修プログラム後に実施した参加者への聞き取り調査と記述内容から、研修プログラムは高い評価を得たことが明らかとなった。同時にプログラムの課題も明らかとなった。すなわち、参加者の専門性とそれに併せたプログラムの目的と内容の問題である。アジア地域諸国においては、学校教育の中で家庭科を必修として位置づけている国が少ないために、参加者の専門性、学校現場での経験などは一様ではなく、参加者の専門性の程度に差が生じ、プログラムの到達目標や内容を調整する必要性が出た。

もとよりアジア諸国は、気候，宗教，民族，言語，歴史，経済などのあらゆる点で、多面性を持ち、先進国、発展途上国を含む。グローバル化に伴い、さらに生活課題が多様に変化しているアジア諸国の現状を踏まえた研修プログラム構築を引き続き検討していく必要がある。

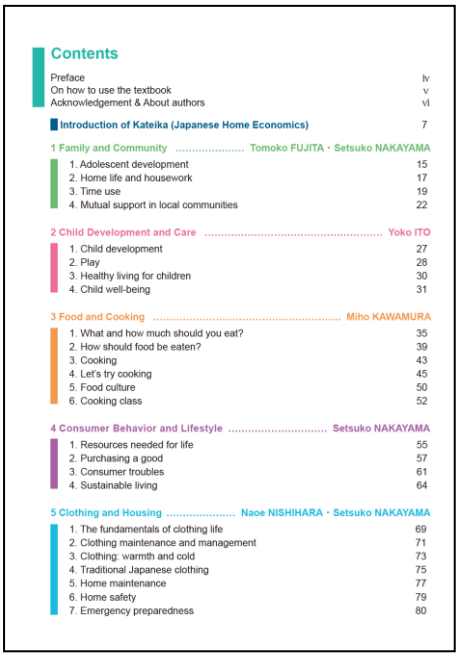
（２）研修用テキスト

研修用テキストは、特定の国を想定して作成するのではなく、日本の家庭科教育の蓄積を世界に発信する役割も兼ねることを意識し、日本の家庭科教科書をもとにした英語のテキストの作成を行うこととした。

テキストの内容は、小学校家庭科教科書を基にし、生活の基礎・基本となる事項、領域内容のバランスなどに重点をおき、小学校家庭科の内容に入っていないものを中学家庭科教科書から選んで補足していく。テキスト全体のキーワードを Quality of life, Security and safety, Wellbeing, Relationships, Life planning, ESD, Independent individuals and supports, Global citizenships, Gender issues, Cultural diversity, Scientific perspective として、１）家族・共生、２）子どもの発達と保育、３）食と調理、４）消費行動とライフスタイル、５）衣と住の五つに内容を括り、構成することとした。

この研修テキストは『A draft of text book for Home Economics Professionals learning program』として一部を研修プログラムで使用した。

研修プログラムから出た課題を踏まえ、テキストの内容の精選と改善を検討し、『A text book for Home Economics professionals Learning Program』を作成した。本テキストは国内外の家庭科専門性の向上に寄与し、日本の家庭科を国外に向けて広く発信する役割を担うものでもある。



Contents

Preface iv
On how to use the textbook v
Acknowledgement & About authors vi

Introduction of Kateika (Japanese Home Economics) 7

1 Family and Community ..... Tomoko FUJITA・Setsuko NAKAYAMA
1. Adolescent development 15
2. Home life and housework 17
3. Time use 19
4. Mutual support in local communities 22

2 Child Development and Care ..... Yoko ITO
1. Child development 27
2. Play 28
3. Healthy living for children 30
4. Child well-being 31

3 Food and Cooking ..... Miho KAWAMURA
1. What and how much should you eat? 35
2. How should food be eaten? 39
3. Cooking 43
4. Let's try cooking 45
5. Food culture 50
6. Cooking class 52

4 Consumer Behavior and Lifestyle ..... Setsuko NAKAYAMA
1. Resources needed for life 55
2. Purchasing a good 57
3. Consumer troubles 61
4. Sustainable living 64

5 Clothing and Housing ..... Naoe NISHIHARA・Setsuko NAKAYAMA
1. The fundamentals of clothing life 69
2. Clothing maintenance and management 71
3. Clothing: warmth and cold 73
4. Traditional Japanese clothing 75
5. Home maintenance 77
6. Home safety 79
7. Emergency preparedness 80

図１『A text book for Home Economics professionals Learning Program』目次

以下に各章の概要を示す。

① Family and Community

本章は冒頭で、青年期には、生活的自立、経済的自立、精神的自立が必要であることを知る。自立とは、自分一人で行えるようにな

ると同時に、周囲と助け合いながら生活する「共生」も重要であることを押さえる。その際、障がい者や高齢者の暮らしも取り上げる。自分が今後どのように生きていきたいか、ライフプランニングを行う。次に、家庭には、自分や家族の生活を支える仕事があることに改めて気づかせ、自分が分担できる仕事について考え実行できるようにする。その際、男は外、女は内といった価値観に縛られないように配慮する。家庭の仕事ができるようになることは、男女問わず自立した生活のために大切なことであり、性別による適性や能力差はないことに気付かせる。さらに、人々の生活時間を把握し、国や地域、男女での時間の使い方の違いなどを考えることによって、時間という資源を有効に使う必要性にも気づかせる。家庭の範囲にとどまらず、地域社会へも目を向けさせる。家庭生活が，家族の協力だけではなく，近隣の人々とのかかわりで成り立っていることが分かるようにする。

② Child Development and Care

この章では、子どもの心身の健やかな発達を促し、自立を育むための生活習慣を身につけるような保育のあり方を学ぶという趣旨から、子どもの発達と生活に関する基本的知識を学習できるようにした。特に、子どもにとっての遊びの意義や遊びの発達を学ぶことで、子どもが生き生きと遊ぶ姿をイメージしながら学べるように配慮した。また、わが国の保育学習の特徴でもある「子どもとのふれ合い」を盛り込み、一緒に遊ぶという活動を通して、子どもとの関係性における社会的スキルが高められるようにした。さらに、子どもの福祉についての項目を設け、子育て支援に関する地域・社会の役割について、より具体的に現実的に考えていけるように工夫した。

③ Food and Cooking

本章は、食品の栄養的特徴や選択方法、料理について学び、とくに世界無形文化遺産となった和食を題材としてその特徴を多面的に学ぶように構成した。また、日本の家庭科教育の特徴である「基礎的な知識・技能を段階的に効率よく習得する」方法を援用し、このテキストで学んだ内容が日常生活で重要な知識・技能となり、個々の学習者によってさらに応用できるように工夫した。また調理技能の習得については、習得することが学習者にとってどのような意味があるのかを理解できるようにして、技能を身に付けることの意義を現在から未来にわたってイメージできるようにする。

これらはこれまで日本の家庭科教育で行われてきた基礎から応用へという食生活学習の方法を踏襲しながらも、基礎的な学びがどのように応用へとつながるのかを理解することを明確にしようとするものである。

④ Consumer Behavior and Lifestyle

本章の学習の導入として、人やお金や時間を媒介として、ものや商品、サービスが生産されと消費され、私たちの生活が成り立っていることを位置づけている。商品経済が発達やグローバル化の進行により、自分の予算や目的にあった商品を選択することが難しくなっている。従って、ものや商品・サービスの選択や購入に関する内容は重視する。特に、購入の仕方や支払い方が多様になっていることから、仕組みが簡単にわかるように扱った。また、この多様な仕組みを巡って、消費者トラブルや被害に合うことがあるため、身近な事例を用いて、どのように解決したのか紹介した。さらに、トラブルや被害から消費者を守るための法律や消費者の権利について含めた。

また、消費には、資源の保全の問題や廃棄の問題、さらには、ものや商品の選択の時に行う意思決定をどのような価値観を持って行うのかという地球規模で考えなければならない課題がある。消費行動に伴い、私たちは、人権や環境、資源などの課題をグローバルレベルで考えられるよう工夫した。

⑤ Clothing and Housing

衣生活分野では、衣服の役割を確認し、その機能や工夫について述べる。私たちは、衣服を入手し、適切な手入れをしながら着用を繰り返し、着なくなった服を処分しながら衣生活を送っている。衣服を入手するところから、処分するところまでを、トータルに考える視点をもつことで、持続可能性について意識させ、基本的な知識と技術を修得できる内容とした。また、基礎縫いやボタンつけなどの基本的な技術をとりあげ、生活に応用できるようにする。着装と文化の項目では、日本の生活や自然とかかわりながら育まれてきた、和服を取り上げた。衣服の調節によって、空調に使う省エネルギーを図る、クールビズの取り組みなど、日本独自の衣生活にかかわる内容も紹介した。

住生活分野の内容は、アジア諸国においては、あまり教育が行われていないことから、どの国や地域、文化圏においても重要である内容で、日本の優れた教育実践があり、かつ、テキストを使用する対象者の発達段階に合致していることを検討し、項目を精選した。

片付けや四季のある暮らしの工夫など諸外国の家庭科ではあまりみられない、日本の特徴であるといえる。また、住まいの安全や災害に対する項目は、地球規模で重要になっている課題であり、具体的な災害の事例を複数取り上げた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 伊藤葉子、中山節子、家庭科における ESD 実践のための現職教員向け教育プログラムの開発、日本家政学会誌、査読有、66 巻、(2015)、351-359

② 中山節子、伊藤葉子、河村美穂、藤田智子、西原直枝、アジア地域における家庭科プロフェッショナルプログラムの開発、千葉大学教育学部紀要、査読無、63 巻、(2015)、29-34

〔学会発表〕（計２件）

① Setsuko NAKAYAMA, Yoko ITO, Miho KAWAMURA, Tomoko FUJITA, Naoe NISHIHARA, A Development of Learning and Training Program for Home Economics Professionals in Asian Regions, 18th Biennial International Congress of Asian Regional Association for Home Economics, 2015年8月4日, Hong Kong Institute of Education(香港)

② 中山節子、伊藤葉子、河村美穂、藤田智子、西原直枝、アジア諸国における家庭科プロフェッショナル育成の研修プログラム及び研修テキストの開発、日本家庭科教育学会第 58 回大会、2015 年 6 月 27 日、鳴門教育大学（徳島県、鳴門市）

〔図書〕（計１件）

① 橋本美保・田中智志監修、大竹美登利編者、池尻加奈子、伊深祥子、小野恭子、叶内茜、菊池英明、倉持清美、後藤さゆり、佐藤麻子、鈴木民子、鈴木智子、平和香子、冨田道子、中山節子、野田智子、日景弥生、藤田昌子、藤田智子、松岡依里子、鄭暁静、一藝社、(2015)、226（中山 22-30・42-50・129-134、藤田 98-109）

６．研究組織

(1)研究代表者
中山　節子（NAKAYAMA SETSUKO）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：50396264

(2)研究分担者
河村　美穂（KAWAMURA MIHO）
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：00361395

(3)研究分担者
伊藤　葉子（ITO　YOKO）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：30282437

(4)研究分担者
藤田　智子（FUJITA TOMOKO）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：40610754

(5)研究分担者
西原　直枝（NISHIHARA NAOE）
聖心女子大学・文学部・講師
研究者番号：90611129